



釈迦牟尼 (世界の偉人)

6月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年6月11日(日)

約 2500 年前、ネパールの南部がインド大平原に連なるあたりにシャカ族という小国があり、その国王の長子として生まれ、80 年の生涯を送ったのが釈迦である。

生後3日にして生母を失ったが、王子として教養を積み生活は恵まれていた。しかし、人生の根源に潜む苦の問題に思いを深め 29 歳の時、その徹底的な解決を求め城を抜け出し、出家する。

出家した釈迦は有名な仙人たちを相継いで訪ねるが、その意を満たせなかった。

付近の山林に立てこもって出家者にふさわしい苦行に専念するのがかえって初志から遠ざかることを自覚する。

それを放棄して、川で身を清め、村の少女から乳粥(ちちがゆ)を受けて体力の回復を待ち、ブッダガヤの菩提樹の下に座って、ひたすらに思索にふけた。

途中に悪魔の誘惑もあったが、ただ一途に瞑想に集中し、ついに大いなる悟りが開けた。

釈迦は、かつて苦行をともにした 5 人の出家者を訪ねて、最初にその教えを説いた。彼等は教化されて仏弟子となる。

これを契機に、一般の人々にも広く呼びかけ、様々な問いに答えて、説法教化の旅を続けた。

その範囲は、竹林精舎と祇園精舎に夏のモンスーン期を過ごすほかは、ほぼ中インド一帯に及び仏弟子も信者も次第に増加した。

釈迦はインド各地に 45 年間も教えを説いて回った。

そして、ついにクシナガラ郊外の沙羅双樹の下で入滅する。ときに 80 歳。

その最後の族における状況は一つの経にまとめられ数々の遺書が残された。

「自己を灯明とし、自己を拠り所として、他のものを拠り所とするなかれ」。

釈迦は生きている人間がどうすれば、悩み、苦しみから解放されるかを解き、死後の世界や「あの世」について語ったことはない。死後の世界について問われたとき、「毒の塗った矢が飛んできて身体に突き刺さったとする。その時この矢はどこから飛んできたのだろうか、この毒の種類は何だろうか、などと考える前にまずやることがある。それは、すぐに矢を抜くことである」。

これが有名な「毒矢のたとえ」、あの世があるか無いかを考えるのは時間のムダと言っている。

参考：(お釈迦さまの脳科学 苦米地英人 アマゾン、日本大百科全書、百度)